

子どもと上手につきあえない大人たち

地域活動実践センター長 三 和 優

母親が初めてもうけた子どもを前にして、何をどうすればよいのか分からず立ち往生するケースが最近多くなったと聞きます。確かに子どもとのつきあいは、とても複雑でむずかしいものです。でも、なぜ子どもと上手につきあえない母親が増えたのでしょうか。乳幼児向けの話し方ができないことも、その原因の一つだそうです。

私たちは、乳幼児に向かって話しかける時には、成人に向かって話をする時とはまったく違って、ある独特な話し方をします。これには、①声のトーンが高くなる、②抑揚が誇張される、③しゃべり方のテンポがゆっくりしている、④同じ言葉を繰り返す、などの特徴があり、しかもこの特徴は万国共通に見られるそうです。そう言われてみると、なるほどと思いつくことなのでしょう。このことを発見したのはチャールズ・ファーガソンというアメリカの言語学者で、1966年のことでした。そして「motherese(マザーリーズ)」と名付けました。日本語では「母親語」と訳されることが多いです。この現象は、老若男女を問わずにみられることから、「インファント・ダイレクテッド・スピーチ(育児語)」ともいわれたりします。文化差がないということは、われわれは「母親語」を学習する必要がなく、ヒトという「種」が進化の過程で獲得したことを意味します。こんなにもありふれたことをそれまで、誰も気がつかなかったなんてとても不思議なことだと思いませんか。

ところで、母親語と混同されるものに、「赤ちゃん言葉(ベビー・トーク)」というものがあります。これは、漫画のサザエさんで、タラちゃんがよく使う「～でちゅ」とか、自動車のことを「ブーブー」、ニワトリを「コッコ」というようなことです。つまり母親語はどういう単語を用いるかとは無関係であり、語りの調子のことで、文化を超えた普遍的なものであるのに対して、赤ちゃん言葉は用いる単語に関わることであり、国によって使用しない文化もあるということが大きな違いです。

ところで、人はなぜ母親語を話すのかというと、それは、赤ちゃんが注意を向けやすいからです。つまり、母親語は赤ちゃんが受信しやすい周波数(音の高さ)へと無意識にチューニングされたものなのです。子どもと上手につきあえないおとなとは、成人に対する発話チャンネルを切り替えて、乳幼児向けにすることができないということなのです。どうも、私たちはきょうだいとのつきあいを通して、子ども同士のつきあいを学び、そして大人になって子どもと出会った時、適切な対応ができるように発達するのではないのでしょうか。ですから、一人っ子は母親語が苦手なのです。これも「少子化」の影響かもしれません。自信のない方は、「母親語」で絵本を読んであげる練習をすれば、すぐ身に付くようですから、ぜひ試してみてください。